

な医療が必要な重介護ユニットを編成している。

重介護ユニットの食堂・居間は廊下部分に設けられているため、狭く、台所もないため、生活に広がりがない（定点観察調査より）。一方、食堂・居間が分離し台所のあるユニットでは有効利用されていない問題が生じている。重介護ユニットでは、生活が単調になりがちであるが、過剰な刺激は必要かどうか、反面、自立度の高いユニットでは設備を有効利用し調理、娯楽やレクなどの活動を増やして生活に変化をもたらすなど、各ユニットのニーズに応じた環境整備・サービスの提供が課題として挙げられている。

#### 4. ケアの効率化

##### ①ユニット間の協力体制

ユニットの数を増やし細分化した分、ユニット毎の職員数に偏りができ、職員数が不足する、職員の行動範囲が把握できない、事故の見守りが不十分などの課題が生じている。この解決策として、人手が不足する時間帯は隣のユニットに行き、職員が協力しながら調整する（定点観察調査より）、隣のユニットに利用者を移動するなどして工夫している。限られた職員数でユニットケアを行うには課題は多いが、常にユニット相互の情報交換しながらユニット間の協力体制を整えていくことも、サービスの質を確保するために必要とされる。

##### ②物品購入の管理

ユニットで購入した備品などを物品購入管理帳に記録し会議で報告して、効率化を図っている。

#### 5. サービスの質の確保

①生活環境（ハード、ソフト）を改善する担当者を決める、②ユニットで調理をする時に事後チェック表を作成し栄養管理を行うなど、ユニット毎のサービスの質を確保するため様々な取り組みを行っている。

以上、従来型特養でユニットケアを先駆的に実践している施設のユニットケアに至るまでの

取り組みと実態、課題をまとめた。この事例にみるように、ユニットケアを始める前には、確固とした動機付けがあり、その後も常に問題意識を持ちながら、利用者を主体とした生活の質の向上に向けてソフト、ハードの両面から生活環境を改善していくことが、結果的にユニットケアへの取り組みにつながっているといえる。

J施設では、現在、全面建て替えを計画しており、ユニットケアを超えた、施設ではない生活型の環境づくりが望まれる。

#### 参考文献

- 1) 日本医療福祉建築協会 平成 14 年度課題研究 特別養護老人ホームにおける居住環境の改善ならびに改修に関する研究、2003.3
- 2) ユニットケアで職員が変わる、施設が変わる、ミス・コミュニテイ VOL 26、2002
- 3) 高齢者痴呆介護研究・研修東京センター、日本医療福祉建築協会編集 ユニットケア導入のための施設改修の手引き、2004.3

## 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境整備継続の研究 —介護職員のストレスとバーンアウトの視点から—

研究協力者：田辺 毅彦（北星学園大学教授）

これまでの研究において、既存の回廊型大規模特養ホームをユニットケアに環境移行することが、介護スタッフのストレス低減につながることを示されたが、さらに1年半後の環境整備の継続に伴う問題点をストレスとバーンアウトの視点から検討することを目的とした。調査は、北海道にあるK特養ホームで行われ、環境移行が終了した2002年と2004年に、23名の介護職員を対象に、バーンアウトおよびストレス内容とストレス対処について質問紙調査と聴取調査を実施し、結果の比較を行った。その結果、バーンアウト得点とストレス内容得点の増加が見られたが、ユニットケア環境整備を良好に継続するためには、ユニット同士の孤立を解消して、コミュニケーションを活性化し、情報交換や職場システムによる問題解決の環境作りを促進することが最も重要であることが示された。

### A. 研究の背景と目的

ユニットケアは、グループホームと並んで厚生労働省が高齢者保健福祉政策の中で、利用者同士や、利用者と介護職員の対人的交流の増加など、痴呆介護の質的向上を目的として推進してきた小規模形態の介護システムである。加藤ほか<sup>1)</sup>は、グループホームおよびユニットケア等における小規模ケアの有効・効率的な介護のあり方に関して検討し、その有効性を示しているが、小規模ケアを実施する際には、その規模と職員配置の問題や、ハードとソフトの補完性の問題、柔軟な職員配置などが必要であること、また、痴呆介護の質を向上させるためには、スタッフ自身の技能向上のための継続した研修が必要であることもあわせて指摘している。鈴木<sup>2)</sup>もユニット型のケアが従来型と比較して、ケアスタッフの適応過程が異なることを示唆し、特に経験者と新規採用者の相違を強調している。このような状況の中で、新型特養施設の建設だけでは

なく、大規模な既存特養ホームの施設空間および介護環境をユニットケア形式に改築（たとえば、大森ほか<sup>3)</sup>）、環境整備する試み（たとえば、足立ほか<sup>4)</sup>）も数多く行われており、今後は経済的な理由からも、このような試みが増えることが予想される。これは、利用者だけでなく、職員の介護に対する意識向上にもつながると考えられるが、従来の介護体制や方法を大幅に変更する必要にも迫られ、施設経営上の理由による、経済性、効率性重視のしわ寄せが、介護スタッフへの過重労働やストレスとして向かう可能性もある<sup>5)</sup>。佐藤<sup>6)</sup>は、施設の個室化やユニットケア化によって、介護スタッフ1人当たりの労働負担は増加せざるをえないこと、経営的には職員増を図ることも困難でありながら、夜勤体制を組んでいるため、慢性的な介護スタッフ不足に陥りやすいこと、などの要因から、より良い介護環境を作ろうとする努力とスタッフ不足という矛盾の中で介護を实践せざるをえない危険性

を施設は十分認識すべきであると述べている。それでも、このような介護環境の変化が介護スタッフにストレスを与えるとしても、最終的には、環境配慮を計画的に実施したり、周囲のスタッフが意図的に関わることで低減できるという報告も行われており<sup>7)</sup>、田辺ほか<sup>8)</sup>も、既存の回廊型大規模特養ホームをユニットケアに環境移行することが、介護スタッフのストレス低減につながることを示している。本研究においては、この田辺ほかの調査をさらに続行し、環境整備の継続に伴う問題点をストレスとバーンアウトの視点から検討して、今後のユニットケア環境移行の際に参照となる提言を行うことを目的とした。

## B. 対象と調査方法

### 1. 調査対象施設の概要

この調査は、北海道洞爺湖西南に位置するK特養ホームで行われたが、ここでは、2001年10月からは、回廊式既存棟において中重度の痴呆性高齢者、臥床者を対象としてユニットケアを導入した。具体的には、ユニットケア実施前には、2生活単位（1生活単位に50人が所属し、デイ空間は1生活単位に1箇所）であったものが、最終的なユニットケア環境導入後には、7ユニット生活単位（1ユニットに18人が所属し、デイ空間は1ユニットに2箇所以上で、調査対象ユニットでは、デイ空間面積が約2倍となった）に転換された。そして、介護スタッフは、臥床利用者のユニットの場合4名、それ以外の利用者のユニットの場合6名であった。2001年よりユニットケアタイプに約1年かけて環境整備し（2001～2002年）、その後、PEAPによる環境改善チェック（2003～2004年）を継続して行っている。

### 2. 調査手続き

介護スタッフの心身状態に生じるスト

レスの影響については、質問紙によるバーンアウト感と面接による聴取調査結果を基に検討を行った。バーンアウトは、職場状況と個人の問題を総括的に示すストレス指標であり、マズラック・バーンアウト測定尺度（Maslach's Burnout Inventory 以下、MBIと略称）を、田尾・久保（1996）が日本語に標準化した質問紙<sup>9)</sup>は、数多くの研究に採用されて事例が蓄積されているだけではなく、下位尺度が、情緒的消耗感、脱人格化、個人的達成感の3要因に分けられ、バーンアウトの心身にわたる症状を包括的にとらえていると考えられる。

質問紙は、MBIを用いて、17項目の頻度について「ない：1」から「いつももある：5」まで5段階にわたって尋ねた。そして、西尾ほかのストレス調査項目<sup>10)</sup>を用いて、職場環境でのストレスについて26項目、ストレスへの対処方法について30項目を、同様に5段階で評定して頂いた。また、年齢、福祉実務年数、現在の職場あるいは活動の場での経験年数、転職・転勤の希望の有無と調査に関する自由回答もお願いした。

## C. 結果

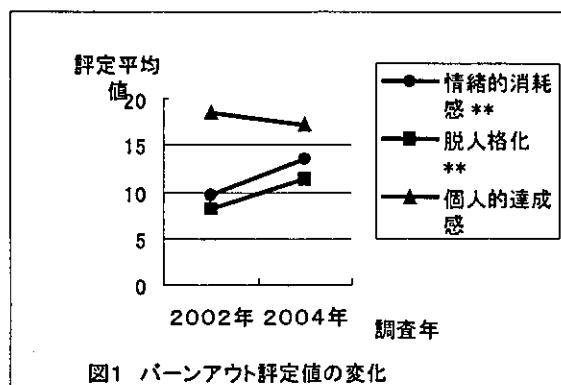
### 1. 調査結果の概要

質問紙調査は、留置式で、ユニットケアへの環境移行の進行と共に行われ、本人に自己記入してもらう形で、2001年10月「22名」、2002年10月「43名」、2003年9月「46名」、2004年3月（46名）の計4回実施した。そして、調査結果の確認のため、2002年11月、12月および2003年11月、12月に、ストレスについての聴き取り調査を行った。その中で、2002～2004年まで継続して勤務している介護スタッフ23名（男性5名、女性18名）を対象に分析を行っ

た。分析にはSPSS統計パッケージを用いた。介護スタッフの概要は2004年時で、平均年齢が27.4歳、福祉関係の職場における実務年数、現在での勤務年数共に、2年未満：5名、2～5年：11名、6～9年：3名、10～20年：4名であった。転職・転勤希望者は2002年時では2名であったのが、2004年時では6名に増加していた。

## 2. バーンアウトとストレス対処

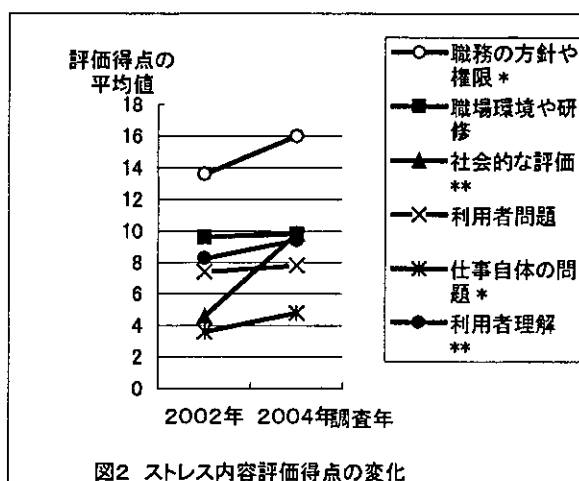
バーンアウトの得点は、各々、情緒的消耗感（以下EEと略）、脱人格化（以下DPと略）、個人的達成感（以下PAと略）の各得点を算出した。各得点について、田尾・久保の診断基準によれば、平均得点は「大丈夫」あるいは「平均的」の範囲内であったが、個人的なデータを確認すると、各尺度において、1年半後には、「注意」や「要注意」の分類に入る者が増加しており、図1からも明らかな通り、EE得点（ $t=-4.01$ 、 $df=22$ 、 $p<0.01$ ）、DP得点（ $t=-2.90$ 、 $df=21$ 、 $p<0.01$ ）ともに有意な増加を示している。PA得点も若干減少しているが、統計的な差は見られなかった。



次に、職場環境でのストレス26項目については、図2で示される通り、6つのカテゴリーに分けてその平均値の変化を示した（カテゴリー分類は、西尾ほか<sup>11)</sup>による）が、「職務の方針や権限に関する問題（ $t=-2.29$ 、 $df=15$ 、 $p<0.05$ ）」、「社会的な評価に関する問題（ $t=-3.77$ 、 $df=21$ 、 $p<0.01$ ）」、

「仕事自体の問題（ $t=-2.13$ 、 $df=22$ 、 $p<0.05$ ）」、「利用者理解に関する問題（ $t=-3.25$ 、 $df=18$ 、 $p<0.01$ ）」など、ほとんどの項目においてストレス得点が有意に増加していた。特に、社会的な評価に関する問題として示される専門職としての評価の不十分さや、利用者理解のむずかしさなどがストレスの主要原因と推察される。

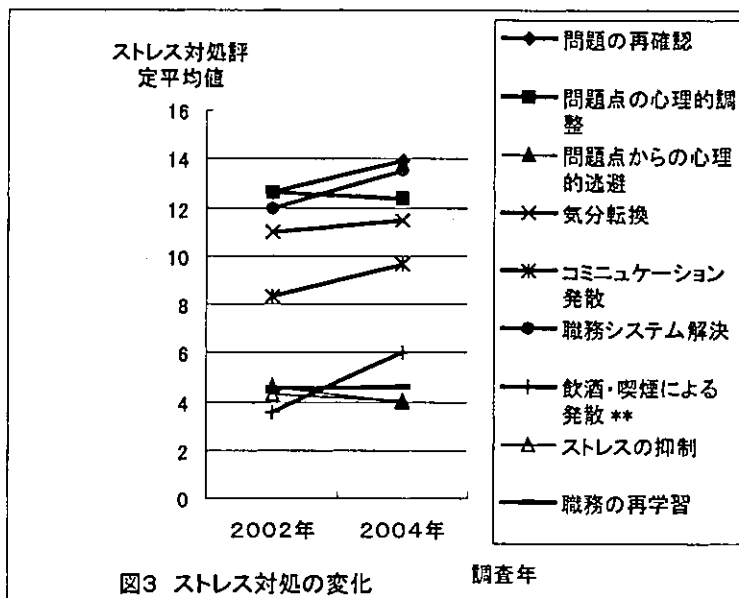
ストレスへの対処要因30項目についても、職場環境でのストレス同様、9のカテゴリーに分けてその平均値の変化を示した



（図3参照）。図より明らかな通り、7カテゴリーにおいて得点が増加しているが、統計的に有意であったのは、「飲酒・喫煙による発散（ $t=-3.14$ 、 $df=13$ 、 $p<0.01$ ）」のみであった。ストレスへの対処が、職場での問題検討よりも私的な発散に偏っている現状が伺える。

聴取調査においては、2002年の環境移行後、いくつかの課題はあったものの、職員のユニットケアに対する反応は総じて好意的なもので、それまでよりも利用者との会話が増えたこと、介護作業量のペースダウンから心理的な余裕ができ、利用者の心理的安定にもつながり、帰宅願望や徘徊の程度が低くなったことなども報告された。1年半後には、環境整備後の配置転換による、新たなユニットの事情把握が不十分であることや、ユニット内でのスタッフ同士

の人間関係の構築の苦勞などの報告も寄せられた。そして、ユニット間の情報交換やスタッフ同士のコミュニケーションの不足が挙げられ、業務の多忙さから心身症状を訴える者もいた。また夜勤時の人手不足などによる介護への不安感も述べられた。このことから、環境移行後に示された課題がなかなか解消していない現状が示されていると思われる。



#### D. 考察と今後の展望

スタッフのバーンアウト得点は、環境移行の1年半後には上昇しており、環境移行直後のストレス低減状態を保つことができなかった状況を反映しているものと考えられる。これは、環境移行前から勤務していたスタッフも、新人スタッフも同様であり、ストレスの少ないユニットケアを維持することのむずかしさが示されている。その原因について検討してみると、専門職としての評価の不十分さや、利用者理解のむずかしさなどがストレスの中核となっていながら、そのストレスへの対処が、職場での問題解決システムの利用よりも個人的なストレス発散に偏っている現状にあると思われる。聴取調査の結果からも、少ない人員で

の業務遂行に対する不安や、お互いの情報交換やコミュニケーション不足が挙げられている。高口<sup>12)</sup>は、少ない人数配置で仕事をせざるをえない介護職員が、どうしたら孤立せずに心理的に充実した仕事ができるかと問われて、他部署（PT、OTや厨房など）との連携はとれているか、職員同士の利用者に関する情報共有の工夫がなされているか、他のユニットの利用者の情報が少

ない夜勤時の不安が解消されているかといった内容についての検討を勧めており、ユニットの閉鎖性の打破、生活空間が狭小化することを防止するための施設外での活動による気分転換、中間管理職を育成することや、リーダーの交代制、他の職員によるリーダーのバックアップなども提案している。更にこのような試みに加えて、業務システムや家族・友人といった社会的援助資源を最大限利用して、積極的な心理的援助を求める方策

も検討すべきであろう。早坂<sup>13)</sup>も教育支援やミーティング等のシステム化による積極的対処スタイルの強化を組織的に行うよう述べている。今回の報告は、一施設の事例検討であるが、日本の介護支援システムの将来像が不透明な部分が多い現状で、介護システムの調整や変更に対するスタッフの柔軟な対応能力の育成は、今後も重要な課題として残るとと思われる。我々は、今後もこの調査を続行し、介護スタッフと共にストレス対処と支援の方策を探っていく必要があると考えている。

【引用文献】

- 1) 加藤伸司、長嶋紀一、大橋美幸ほか：痴呆高齢者のグループホーム及びケアユニット等における有効・効率的なケアのあり方に関する研究。厚生科学研究費補助金(21世紀型医療開拓推進研究事業)平成13年度総括研究報告書、1-10(2002)。
- 2) 鈴木聖子：ユニット型特別養護老人ホームにおけるケアスタッフの適応過程 老年社会科学 26(4)：401-411(2005)。
- 3) 大森彌 編集代表：新型特別養護老人ホーム一居室化・ユニットケアへの転換一。2-30、中央法規出版、東京(2002)。
- 4) 足立啓、山内美保、松原茂樹ほか：痴呆ユニットケアの導入が入居者に与える影響に関する研究一既存の特別養護老人ホームを事例として一。高齢者痴呆介護研究・研修仙台センター研究年報、2:63-74(2001)。
- 5) 永田久雄、李善永：特別養護老人ホームでの介護労働の実態調査と今後の高齢介護労働の検討。労働科学、75(12)：459-469(1999)。
- 6) 佐藤眞一「施設における介護」柴田博・長田久雄 編『老いのこころを知る』ぎょうせい、122-135(2003)。
- 7) 児玉桂子、原田奈津子、潮谷有二ほか：痴呆性高齢者への環境配慮が特別養護老人ホームスタッフのストレス反応に及ぼす影響。介護福祉学、9(1)：59-70(2002)。
- 8) 田辺毅彦、足立啓、田中千歳ほか：特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境移行が介護スタッフの心身に与える影響一バーンアウトとストレス対処調査一。痴呆ケア学会誌、(2005年3月掲載予定)。
- 9) 田尾雅夫、久保真人：バーンアウトの理論と実際一心理学的アプローチ。誠信書房、東京(1996)。
- 10) 西尾祐吾、清水隆則、田辺毅彦編：ソーシャルワーカーにおけるバーンアウト一その実態と対応策一。中央法規出版、東京(2002)。
- 11) 前掲書(10)
- 12) 高口光子『ユニットケアという幻想』雲母出版、東京(2004)。
- 13) 早坂聡久：特別養護老人ホームにおけるユニットケア導入に関する研究一ユニットケア導入前後の比較をとおして一日本興亜火災福祉財団ジェロントロジ

平成 16 年度  
(2004 年度)

## 研究成果の刊行に関する一覧表

学術論文

国際会議

国内学会口頭発表

その他

学術論文

著者氏名	論文タイトル名	発表誌名	年月	ページ
田辺毅彦、足立啓、田中千歳、大久保幸積、松原茂樹	特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境移行が介護スタッフの心身に与える影響—バーンアウトとストレス対処調査—	日本痴呆ケア学会誌第4巻第1号	2005,3	未定
赤木徹也、足立啓	痴呆性高齢者の住居環境における環境行動的視点の重要性	日本痴呆ケア学会誌第3巻第2号	2004,9	pp.230-238
大島千帆、児玉桂子、後藤隆、足立啓、三宅貴夫	痴呆性高齢者の在宅環境整備に関する研究；家族介護者の自由記述に基づく住居配慮の次元	日本痴呆ケア学会誌第3巻第1号	2004,3	pp.30-40
Gerald D.Weisman、訳：松永公隆、足立啓	痴呆症状緩和とケアをたすける環境づくりの指針と手法	日本痴呆ケア学会誌第3巻第1号	2004,3	pp.41-55
林悦子、狩野徹、足立啓	普及期におけるグループホームの現状と課題	日本痴呆ケア学会誌第3巻第1号	2004,3	pp.64-70

国際会議

著者氏名	論文タイトル名	発表誌名	年月	ページ
IMAI, Akira, MORI, Kazuhiko and ADACHI, Kei	The Study on Behavioral Change on Environmental Improvement in Nursing Home	Proceeding of EDRA36, Vancouver, Canada	2005	未定
KATO, Yusuke, MORI, Kazuhiko and ADACHI, Kei	A Study on Influence of Environmental Improvement on Place Trips from the Viewpoint of Competence Level of the Elderly in Nursing Home	国際シンポジウムEBRA, Tianjin	2004,10	pp.348-354
S.Matsubara, K.Adachi, K.Funahashi	The Structure of care service to support each elderly resident with dementia in two facilities with group livings	Proceeding of EDRA34, Minneapolis, USA	2004	pp.206
K.Kodama, Y.Kegeyama, H.Shimogaki, K.Adachi	The Development and Verification of a Handbook for the Institutional Environment for the Elderly with Dementia	20th International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan	2004,10	pp.425
C.Oshima, K.Kodama, T.Gotoh, Y.Miya ke, K.Adachi	The Development of a Handbook for the Home Environment for the Elderly with Dementia and Family Caregivers	20st International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan	2004,10	pp.306

国内学会口頭発表

著者氏名	論文タイトル名	発表誌名	年月	ページ
郡山智彦、足立啓、松原茂樹、田中千歳、田辺毅彦、大久保幸積、杉村和子、赤木徹也	従来型回廊式特養における痴呆ユニットケアに関する研究	日本痴呆ケア学会大会抄録集	2004,9	pp.211
田辺毅彦、足立啓、田中千歳、大久保幸積、松原茂樹	ユニットケア環境整備の継続と、それに伴う介護職員の心身ストレスの特徴—バーンアウトとストレス対処—	日本痴呆ケア学会大会抄録集	2004,9	pp.187
加藤悠介、足立啓	特別養護老人ホームの共用空間の模様替えが高齢者の行動に及ぼす影響について	第5回日本痴呆ケア学会誌抄録集	2004,9	pp.210



重田洋志、村上綾江、足立啓、田中千歳、見玉桂子、影山優子、森一彦	PEAP(日本版)適用による従来型特別養護老人ホームのケア環境に関する研究(その1)ーキャプション評価と定点観察による改善プロセスー	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.377-378
豊田学、村上綾江、足立啓、田中千歳、見玉桂子、影山優子、森一彦	PEAP(日本版)適用による従来型特別養護老人ホームのケア環境に関する研究(その2)ーキャプション評価と定点観察による改善プロセスー	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.379-380
今井朗、加藤悠介、森一彦、足立啓、見玉桂子	PEAP(日本版)適用による従来型特別養護老人ホームのケア環境に関する研究(その3)ーキャプション評価と定点観察による改善プロセスー	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.381-382
松原茂樹、舟橋國男、足立啓、品川靖幸	従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践・未実践について	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.311-312
品川靖幸、足立啓、舟橋國男、松原茂樹	従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践の現状と課題	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.313-314
森田晃市、山口大輔、田中千歳、足立啓	痴呆性高齢者グループホームにおける居室構成のあり方に関する研究	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.293-294
加藤悠介、今井朗、森一彦、足立啓	特別養護老人ホームの環境改善に伴う高齢者のトイレに行く場所移動の変化に関する研究	日本建築学会大会学術講演便覧集E-1分冊	2004,8	pp.387-388
村上綾江、菊地剛司、重田洋志、田中千歳、森一彦、足立啓	従来型介護老人福祉施設へのPEAP(日本版3)適用によるケア環境の改善過程に関する研究	日本建築学会近畿支部報告集 計画系 第44号	2004,6	pp.177-180
加藤悠介、今井朗、森一彦、足立啓	特別養護老人ホームの環境改善に伴う高齢者の滞留場所とトイレに行く場所移動の変化に関する研究	日本建築学会近畿支部報告集 計画系 第44号	2004,6	pp.173-176
山口大輔、田中千歳、足立啓	痴呆性高齢者グループホームにおける居室構成が入居者・職員に与える影響ーKホームを事例としてー	日本建築学会近畿支部報告集 計画系 第44号	2004,6	pp.181-184
今井朗、加藤悠介、森一彦、足立啓	高齢者介護施設の環境改善における必要意識の比較分析	日本建築学会近畿支部報告集 計画系 第44号	2004,6	pp.189-192
品川靖幸、足立啓、田中千歳、舟橋國男、松原茂樹	従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践の現状と課題について	日本建築学会近畿支部報告集 計画系 第44号	2004,6	pp.165-168
松原茂樹、舟橋國男、足立啓、品川靖幸	従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践・未実践の現状について	日本建築学会近畿支部報告集 計画系 第44号	2004,6	pp.169-172
田辺毅彦、足立啓、田中千歳、大久保幸積、松原茂樹	特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境整備が介護スタッフの心身に与える影響(2)ーバーンアウトとストレス対処方策調査ー	日本老年社会科学会 第46回大会発表論文集	2004	pp.45

その他

足立 啓	痴呆症ケアと生活環境	月刊「ふれあいケア」	2004,10	pp.32-35
足立 啓	痴呆ケア標準テキスト 痴呆ケアの実際II：各論「施設における環境支援」	日本痴呆ケア学会編 (株)ワールドプランニング	2004,8	pp.231-247
足立 啓	居住環境の改善がもたらす痴呆症への効果	ヘルスケアコンパス創刊3号	2004,3	pp.4-6

課題番号 H16-痴呆・骨折-007

---

従来型施設における痴呆性高齢者環境支援指針の適用による  
環境改善手法の開発と効果の多面的評価

---

平成17年3月発行

和歌山大学システム工学部環境システム学科 足立 啓

〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930番地

TEL 073-457-8361 (研究室)

FAX 073-457-8362 ( " )